

## 卷七 防水集

## 百姓伝記卷七 坊水集目録

一「坊」底本のまま。防水集。治水に関する章。

- |                |               |
|----------------|---------------|
| 一、序            | 一、大河の堤をつく事    |
| 一、みよとめ堤をつく事    | 一、三州矢作川筋瀬違物語  |
| 一、木津川瀬違ものがたり   | 一、遠州横須賀湊普請物語  |
| 一、雨池・堀・堤普請心得の事 | 一、川除心得の事      |
| 一、川除、石わくの事     | 一、川除、さる尾の事    |
| 一、同、蛇籠の事       | 一、川除、袖わくの事    |
| 一、同、うしの事       | 一、川除堤に柳・竹を植る事 |
| 一、堤に芝を付る事      | 一、水の出はなをしる事   |
| 一、水の引方を知事      | 一、大水をふせぐ事     |
| 一、切ながしの事       | 一、潮よけ堤善悪之事    |

- |                |               |
|----------------|---------------|
| 一、国々津浪ものがたりの事  | 一、山川の流をふせぐ事   |
| 一、岩川・砂川・沼川をほる事 | 一、井堀の事        |
| 一、雨池をかまへる事     | 一、堀をほる事       |
| 一、尾州熱田新田物語の事   | 一、常陸ふかわ新田物語之事 |

## 目録終

## 百姓伝記 坊水集序

集 一、抑<sup>一</sup>水は方円の器にしたがひ、人のこゝろにかなひ、船をうかべ、筏<sup>三</sup>を流すに便有<sup>二</sup>。宝土<sup>四</sup>のうるをひとなりて、万物を養ふ。一滴をもたつと<sup>五</sup>まずと云事なし。しかりといへども、洪水・満水に及びては、山を崩し、宝地を洗ひ、人家を流す費あり。天地の災難なげきてもあまりあり。物の及ばざる事は、大水を手にてふせぐと世話にもいへり。されども我々が住国<sup>六</sup>村里に、往古より有来る池・河をば、年々歳々修理を加へ、水災

一 ここでは水の性質そのもの。方は正方形。  
 二 木材を流下するため組んだ木材。当時の木材輸送の主要方法であった。  
 三 耕地。  
 四 尊とまず。尊重しない。

のしぐ心得肝要なり。依<sup>レ</sup>之、本朝の大河には池・堀のかこひ、普請の仕かた善悪、見及び聞伝たる所を、予、ひそかに書付、坊水集と名づけ、百姓伝記の類巻にのする。堤<sup>二</sup>・井溝<sup>一</sup>・川除<sup>三</sup>普請は、世に耕作初りし上代よりこのかた、土民の役たり。末代も猶油断ありては、子々孫々水災にあふべし。

### 大河の堤をつく事

一、本朝の大河、五畿七道にそのき多ある大河、水上を尋みるに、あなたこなたの山間・谷々より、細川流れあひて、海へ落込所はみな大河となり、河はひろく、堤大きになる。海への落込と山ちかき大河は、必水の勢ひつよし。海へ流込所より山々へ遠き大河は、水勢よはく、川ふかし。早河は石川多し。水の流をそきは砂川かどる川なり。堤は我々が村里の田畑のかこひ、在家のかこひにつく。たとへば武家の城廓<sup>一</sup>にことならず。大切なる普請なり。城普請と云ものは、むかしより武家第一の侍衆、毎度城にこもり、大敵にせめられ、その城を持つとげ、また敵の城廓をせめとり、巻ほぐし、その城々の堀・土手のつきやう、へい・や

一 底本・祭本ともに「の。」とある。

二 用水・悪水を流す流路。

三 治水工事。

四 やるべき任務であるが、同時に課せられた夫役・義務労働。

五 海への流入口と水源の山の近い大河川。

六 囲い。防禦のかまえ。築く。土を積みあげ、叩き固める。

七 築く。土を積みあげ、叩き固める。

八 城郭。城の外がこい。

九 櫓・矢倉。物見台または武器庫。

ぐらの有やうをかながへ知たる武士の繩<sup>一</sup>ばりにて取立たる城廓は、小勢にてこもらせらるゝ所を、大勢を以せめるに、責破事<sup>二</sup>不<sup>レ</sup>叶<sup>一</sup>。まれ不功なる武士の繩ばりにてきづきたる城廓は、大勢こもりても、小勢にて安々と責取。両方共につねの備へ善と悪となり。堤を大河の水かこひにつ

くる事、いか程つよき洪水有共、我々がかゝる所のをきらさぬ様につくが功者なり。たとへ満水に及びて、堤をのり越水たり共、半日か一日は、手をあてゝもふせぐ心得肝要也。洪水たり共、半日か一日の大雨にて満水多かるべし。大雨・大風の二日を過たる事なし。二時三時をふせぎ、かこへば引水となる。

一、大河の堤をば二重<sup>一</sup>つきたるがよし。河のはゞをひろく取て、流れ田地と云て、二重堤のうち<sup>二</sup>に田地をかまへ、万一の時は二つめの堤にて大水をふせぎ、流れ田地をすつべし。たとへ堤を二筋つかずとも、河のはゞをひろくとりて、つねには作毛を仕付よ。水はつぼみてなかるゝ時は、川ふかくなり、水勢つよし。ひろがりて流るゝ時は、水勢よはし。一の堤も二の堤も、ねじきをひろく取、堤はらをなる程のいにつき、馬乗<sup>一</sup>をひろくすべし。かうばいのはやきは堤こたへず。馬のりすくなきは、満

一 建築の敷地に、繩をはって建物の位置をきめる事。

二 攻めやぶる。

三 各人の分担の所の意。

一 河の流れにそって内外二重に築く。

二 大洪水のさい流失を予定した田地。流作場。

三 中間に。

四 根敷。堤の下部の幅。なるべく緩傾斜に築き。

五 堤の頂部。馬踏。

水してふせぐに、土俵・切ながし・人の立処なくふせぐに不<sub>レ</sub>叶。かうばいはやきは水もりて、裏くづれするなり。川の大小によりて、堤の太細有<sub>レ</sub>べし。堤ふとければ、たとへこし水有<sub>レ</sub>ても、裏くづれず。秋水には風の吹事多ければ、風当<sub>（かざあたり）</sub>の堤にはみ付事多し。其こゝろへ肝要也。此条は水をき<sub>（き）</sub>する堤をつく儀にてはなし。水のつねつよくあてぬ、しづかなる堤をつくぎ也。

一、大河の流、つねに堤の腰を水の流るゝ堤は、なをく根敷<sub>（ねじき）</sub>ひろく、かうばいをのいにつきて、堤の腰に杭<sub>（くい）</sub>をふり、しがらみをかきて、すて石を多く取込、水にて堤の腰をあらはぬやうに普請せよ。つよく堤の腰を洗ひ流す処をば、そだ小口につぎ、らん杭<sub>（らんか）</sub>を四重も五重もかき、蛇籠<sub>（へびかご）</sub>をかさねふせ、横らん杭をうちて、しがらみをかくべし。

一、大小の堤によらず、宝土をまふける事、ねば真土・へな土を上とせよ。小石まじりの色々真土二番、砂まじり真土三番、小石・小砂四番、黒ぶく土・ぼう砂を用ては、大堤のたもつ事なし。されどもつきやうによるべし。

一、芝小口の堤は、落付はやし。そだ小口の堤は、落付おそく、年数を

一 満水のさい、堤の川側にさしかけ流す竹木。その項参照。

二 越水。堤をこして流れる水。

三 底本・祭本とも「きしる」。みなぎって堤内に水の流れる様か。

四 堤の下部。

五 地中に打ちこみ、または埋める柱状の木材。

六 水流をせくために杭を打ちならべ、これに竹木をそえたもの。

七 堤の根に、水勢をそくために置く石。

八 粗朶こぐち。伐取った木の枝を堤面に埋め、その一端を出す治水工法。後出をみよ。

九 乱杭。無秩序に打つ杭。竹で長く円筒状に編んだ籠。治水用具。その項をみよ。

二 設ける。ここでは積みあげる。

三 三のその項をみよ。以下土の各種についても同じ。

三 堤に芝をはる工法。その項をみよ。

二 堤の容積。

一 水が堤の裏側から洩れ出る、河に面しない堤の部分に洪水が滲出してくる事

二 牝鷄。

三 洪水が堤を急に切ること。

四 抹茶を立てる時のように、土は水にまじりてしまつて、堤を築くことができな

一 水脈止め堤。川の瀬替の時、最も深い水の流路をせきとめる堤。

二 瀬替（流路変更）のため新しく掘った川。

三 臨み。あたって。

経て、竹木くさりて、穴あきてよはくなる。また堤かさへり安し。然ども、満水して堤の裏くづるゝ事すくなし。小石・ぼう砂・黒ぶく・土砂まじりの真土にてつく新堤、五七年のうちは、満水に水裏もりして、くづるゝ也。是は大河大堤の事也。芝小口と云は、地芝を切重ね、水面の方をつく事也。程なく芝生重り居付。されども間敷を多く、大堤をつく事不<sub>レ</sub>叶、人夫・芝大分入ものなり。そだ小口とは、竹木のかりたる根をそろへ、堤の腹へ出し、めんどり羽の如く重ね、次第に土を置、つきてのぼる堤なり。後日よはき堤なり。当分はつよし。押切などが川を急にとめる堤は、土俵・そだを以つかざれば、水をとめることかなはず。また土斗にては、茶をたてる如くにて、つかれざるものなり。

みよとめ堤を付事

一、みよとめ堤とは、流川をせきて、ほりかへ川へ水を流すか、また濠などのほりかへ、潮のさしひき有<sub>レ</sub>し之処をせくに、何方ぞふかき所あり、其所がみよなり。先あさき所よりせきはじめ、ふかき処に望み、大切の普請なり。またふかき処を、はじめつかんとすれば、あさきかた水勢つ

よくなりて、其まゝほれ、ふかくなる。いづれにつきて難義出来る。また宝土の取処によりて、自由ならざる事多し。道せまくしては、人夫のはたらき不叶。先宝土を取処より、つくべき川へのみちの程、人夫多少・はたらき・通ひ自由能やうに覚悟有べし。たとへばそだを入、土俵を運ぶみち筋、わけ／＼にして道筋をかへよ。また荷物を持て来る人夫と、からみにてかへる人足の道筋をかへ、武家に物頭有之ごとくに、人足廿人卅人に一人宛の杖つきを付て、もだ足のなく、あやまちの無之様に覚悟すべし。

一、つき切のみよを中にして、川の上下に杭をふり、竹つな・藤つな・繩つなをはり、舟橋をかけるか筏を組て、其上にそだを敷、むしろ・こも・ねこだを敷て、足場を能して、人夫をかよはせよ。船橋も筏も、ひろせまは人足の多少によるべし。扱、つき切所に、見斗悪しくて、はやくらん杭をふりては、土俵を入、そだを入、宝土を入るゝ害と成。見分肝要也。

一、みよとめの処、川のあなた・こなたに大杭をふり、竹つな・藤つな・繩つなをはり、水にうかべ、また川の上下にも大杭をふ

一 粗朶、切りとった木の枝。

二 土の入った袋。

三 別々にして。

四 空身、荷物を持たないで帰る人。

五 弓組・鉄砲組などの足輕・同心のかしら。

六 人足一組の長。

七 無駄足。

八 竹網。竹を細く割って作った網。

九 藤網。藤の細枝でつくった網。

一〇 舟を数隻ならべてつなぎ、板を渡した橋。

一一 厚織のむしろ。

一二 見当つけ。

一三 帆用につなぎ合せた筵。こもは荒くあんた筵むしろ。

り、つなを十文字にはり、其上に竹木の筏をかき、古疊・床むしろ・ねこだいくゑも敷て、川の上下へは帆こものごとく、むしろ・こもをぬい合、流しかけ置。右の筏の上へ宝土をはこび、堤をつく川の上下に、土俵・そだを順能積、敷中へ土を入よ。扱たかさ二尺三尺に及び、川の上下に流しかけたる帆こものごとくなるむしろにて、はこびたるそだ・土俵・宝土共に包み、また其上上へ土・そだ・土俵を持ち、何重もかまほこなりにつきあげ、水のふかさ・堤の高さを見斗て、猶も堤をよくむしろ・こも・ねこだにてくるみからげ、ほそ杭・竹杭を指かため、手まはしはやく、惣の綱を一同に切て沈めよ。綱かた切なるときは、堤かたぎてなぎれる。其覚悟有べし。大のこぎり・だいきり・おの・まさかり・なたつかひの上手に、かね・たいこひやうしを合、こゑをあげて、たど一旦にきり沈めよ。成就せずと云事なし。河上川下に、捨らんぐひをふり、中しがらみ・根しがらみをつよくかき、上置の土俵・宝土をもちかけ、堤を居つかせ、かためよ。水のくらぬと云事なし。河上の方より腹置の土を持懸、次第に水穴ふさがるなり。はやく芝の実・ひゑを蒔て、上土をしめさせよ。尤切芝を付よ。多月油断ありては、堤損ずる

一四 一時に。一緒に。

一五 片切り。一方だけを切ること。綱をきるに、場所によつて遅速のあること。

一六 あふれる。堤が傾いて水が溢れるの意であらう。

一七 大切。おおが(大籠)。

一八 土堤の補強のため、堤上におく土など。

一九 通りぬけない。

二〇 補強のため、堤の斜面におくもの。

二一 他月。後日。

事有べし。

一、堤下にはる大綱ども、余慶なく、つよくはりては、其つなきれやすし。両方に余分をして、いかだを組べし。おもき宝土を持懸るゆへ、次第次第に沈み、後は水底わづかに残るなり。

此みよとめ瀬違つきの普請は、尾州熱田の新田を、大納言義直公御代に、御国奉行服部小十・酒井久左見分にて、御普請有之、田畠二千余町出来、今上田畠となる。信濃国・美濃国より落合の川、しかも潮のさしひき有之、之処をつかせらる。尾張国一國の工夫をあつめ、只二、三日にもみしきり、河筋共をほりかへ、つきかへたり。戸田・蟹江の前、熱田より桑名への渡海北の瀧なり。慶安年中の儀也。大河共の流込、大方芦原なるによりて、上土也。しかもいま井懸り能、年々満作する。

扱又、常陸国ふかわ新田を近山氏へ被仰付、川の瀬違を被成、右のケ条書の通に普請の方便あり。ことゆへなく成就する。此新田も二千余町程出来す。然ども、近辺・近国は田畑多く、人すくなき所なるにより、本地さへそさうに耕作仕によりて、新田は猶以念を入拵る土民なく、数月御公儀に御物入、御所務無之、近山氏見分をあしき様に世間にてと

りなしけれ共、さにてなし。江戸近辺の町人、隠居処に仕らんと五町三町宛主付、所の土民に預ケ置、少宛 加地子を取ときこえたり。それにては田地よく成べきやうなし。しかも尾州辺の土民と、関東筋の土民は、耕作方雪と墨程ちがひて、関東筋下手なり。また尾州より上方筋は田地すくなく人多きゆへ、所望の土民多し。遠州より東へは田地多く人すくなきゆへ、所望の土民なし。末代とても関東筋の新田は上田畑となりがたし。田地は土民の念頃によりて、能もあしくもなるものなり。近山氏見分はよけれど、作人をすゑる方便あしく、国里の土民の耕作の仕かたかんがゑなくうすきゆへ、所務うすし。却て本田のがいとなる事多し。

一、大河つき切、うしと云て、大杭を用て能事あり。木三本宛を以て、穴を多り拵るなり。此末絵図に記すもの也。石わく・袖わく・川除・猿尾・切流し絵図に記すものなり。筆紙にはのべがたし。みな、なんぎの水をふせぐ仕かたなり。大河近処の土民は見覚・聞覚、少人迄も其道理をよくしるもの也。

一、三州矢作川の流、岡崎より二里程下浅井村と江原村の間に山あり。しかも雲母の出る、小石まじりの岩土なり。其間を川ながれ、水底へは

一 この項、目録には別項として出る。底本行をつづけるが、ここで行をかえる。

二 尾張の熱田宿。名古屋城下町南方。東海道の宿場。

三 徳川義直(一六〇〇—一五〇)。尾張藩祖。家康の第九子。一六〇七年より尾張を領す。

四 木曾川の源流が信濃・美濃阿南山地であることをいう。慶長以後現日光川筋が木曾本流であったことがある。

五 しきりにもみあい。多人数が一時に働くこと。

六 現在名古屋市の西、庄内川・日光川の間に、国鉄関西線の沿線の地。

七 一六四八—一五一年。八 芦の生えた湿地。

九 常陸ふかわ所在知れず。ただし現茨城県龍郷郡利根町に布川あり。同所は江戸時代には下総相馬郡に属す。寛文年中利根川本流を新利根川に移す工事が行なわれている。この項はその時のことを記すか。

二 粗相。粗略。念を入れず、手をぬくこと。

三 年貢。四 捨て地帳上の所持者となること。

五 年貢に加えてとる取分小作料。

六 京都およびその付近。またひろく畿内地方をいう。

七 ねんごころ(念)。まごころとするさま。

八 作人を据えろとは耕作者を選んで居住させること。

九 大河をせきとめて流れを止める工事。

三 牛。牛枠という治水工法。後出「うしの事」の項を参照。

三 底本・祭本ともにこの絵図なし。従来二つの刊本も同様。

三 以下の工法について絵図はないが、それぞれ項を設けて説明している。

三 小人。幼少の人。

三 三河(羽愛知県東部)の大河。岡崎市の西を流れ、現況では西尾市の西を迂迴して知多湾に注ぐ。以下の村名は岡崎市の南にある江戸時代の村名。

ふかけれども、両脇水にほれず、せまき事やうく三十間程にて、五、六町の内を流るゝによりて、大水・満水に、二里水上の矢作まで水さへ、岡崎より半里程川下、和田村・法性寺村・赤浜村・中の郷村の大つゝみ度々にきれ、水下の村々水災にあふ。夫より河下の村々には、青盤村・合願木村の堤数度切て、在家を流し、人をこらす。右の村々はみな川の東へ付堤きは有<sup>レ</sup>之村也。川より西はたの村々、渡り村・佐々木村・桜井木戸村近辺の堤も数度切て、在家水難にあふ。御当家にて米津出羽守殿御先祖米津清右衛門尉殿御奉行にて、浅井村・江原村の川筋を御掘かへさせられ、西尾御城の西のかた、町屋の西をほり通し、平坂村の海へ流し給ふ。前には西尾の御城東のかたを流て、鷺塚の海へ落こみたるなり。其村は菅生川も明大寺村・六名村・和田村・井内村の東を南へ流中嶋村の下にて矢作川と一所につぼみたるなり。今は岡崎御城の南を切流し、矢作川橋の六、七町下にて落合なり。しかも水引よく、難儀すくなし。菅生川の跡、浅井村より鷺塚迄の古川筋、上田畑となる。矢作川は信濃山家より流れ出る大河なり。其御普請慶長年中のよし。三河一國の人夫を以ほらせ、古川をせきしとなり。せきのでだて語伝<sup>かたづた</sup>、覚えたる

一 底本青盤村・合願木村と読める。青野村・合飲木村か。

二 ここでは人家の意。

三 御当家とは、ここで扱ふ矢作川新川細野の項の岡崎城主多家をさすと考へられる。後の遠州横須賀延宝八年の津浪の記事より見れば、執筆当時は横須賀藩主である。

四 現在は西尾市平坂町。

五 矢作古川は現在幡豆郡の奥田町(奥田新田)である。

六 底本のまま。文脈によれば鷺塚の地名なし。以下の叙述と合わない。其頃(比と書いてある)の誤りであろう。

七 以下の地名よりすれば、現在岡崎市街地の南を流れる大平川(勇川)が菅生川切替後の新川であろう。

八 窄む。狭く小さくなるの意で、ここでは狭い所で合流することであろう。

九 『当代記』によれば慶

長十(一六〇五)年。

土民なく、爰に不記。浅井村・江原村山間の古川、竜宮ヶ崎と申て、<sup>いま</sup>今大きな淵にて、浅井村の雲母山に竜宮の社あり。その淵の頭を西東へつき切しなり。五、六十年此かた、川のほれたる事七、八尺、杵丈にをよぶとなり。和田村矢薄堤より浅井村まで、むかし水にひたりたる川柳ども、今は堤腹になりて、段々水つきへ柳をさし、竹を植る也。平坂の海三里程さきまで淵を押し出し、舟付不自由になる。水上は小石川なれども、こしと村辺より海辺まで砂川なり。地底はみなねば真土のかた土多し。

美濃路の大河、すのまた・おこし・さわたり水上は小石川にて、下はみな小砂、海辺へなりては真土なり。東海道筋大河、吉田川・天竜川・大井川・阿部川・富士川・さかわ、海への落込迄小石川なり。水上の山近きゆへなり。六郷川、水上は小石川、下は小砂・真土川也。久慈川・きぬ川も水上石川にて、海きわは砂真土の川なり。伊勢のうち、みをか川・くもで川・とうせい川・いな川・宮川、みな小石・小砂川なり。

一、むかし淀川と木津川の瀬違あり。つき切の堤をば、ひらた船に宝土をつみて、数百艘のり沈め、水とまり、新川へ川筋能つきて後、堤をつ

二 底本では行替えなく前文に続くが、内容を異にするので別行とする。美濃路の大河は木曾・長良・揖斐の諸川。

三 現在の豊川。その河口付近の豊橋は江戸時代吉田とよばれた。

四 あべがわ(安倍川)。

五 酒匂川。

六 現在の多摩川。東海道筋に架橋なく、渡舟、これを六郷の渡しといった。

七 鬼怒川。

八 宇治川・淀川・木津川が巨椋池へ流入した状況から、池と分離する過程をいうか。

九 平田舟。底の平たくて長い舟。

き、舟をほり出すとなり。木津川・淀川は山城の国の大河、近江国・伊賀国より落合の川なり。すまは摂津国大坂へ落て、難波の浦へ落込。小砂・土川也。近江の海水（みづうみ）のすえ、地平かにして水のろし。勢田（せだ）より宇治辺迄山間の水はやし。くこの瀬ありて、湖水の水引かねるもの也。

一、本朝の大河、水上はみな山々の落合にて、小河何筋と云かぎりなくあなた・こなたにて落合、いづれの川も、海辺取分水ふとくなる。必洪水の節は、海の波もたかくなりて、潮と水とたて合（あひ）、引事をそく、満水して堤を押切、田地・在家を流す。水損は海辺に多きなり。

一、遠州横須賀（よこすか）湊は押水よはく、また入江ちいさく、潮の指引（さしびき）もよはくて、小湊なり。西より東へ川筋ありて、湊口は南へまがりくして明、天竜灘の大灘へ落る。日本一の荒磯なり。此湊西より東へ水押有により、湊口次第に東へよる。東へよるにしたがひて、潮指引よはく成、湊口あさく、廻船出入不叶。また浅羽の庄一万石余、水引かね、水損年々出来横須賀御城南、前中土井に水たへて堤損し、田畑損毛し、塩浜をうち埋、諸民なんぎするにより、度々湊口を御ほりかへありしに、ほる処も、つき切の川も、みなほう砂なり。然ども川はど大きなるによりて、大勢

一 潮。琵琶湖。

二 抵抗しあう。

三 現在静岡県小笠郡大須賀町の一部。本書の著わされたと思われる頃の直後元禄頃には西尾氏二万五千石の城下町。当時太田川の一派川の川口港であった。四 川口の港で、その川が上流より押し出す水。

を以つかざれば成就せず。また大水出ざれば押水なき故、湊口あかず。大浪有（なみ）之は只一たんにせき堤を浪にとらる。方々（かたがた）六ヶ敷普請なり。つき切を仕に、潮の差引有（さしひ）之故、潮のさす時は西へ押、引時は東へ流る。宝土（たからど）を持込、土俵を入、そだを置に裏表なく、手廻し六ヶ敷、たんれんうすきときは数度につき損じ、人夫大勢費あり。また潮のたるみ、潮時のかんがへなくては、仕廻の時分悪敷、夜に入普請する事不叶。大水の時節を大かたかんがへねば、新堀の湊口あかず、ほり口を一潮々々に砂にて打うめる。自由不叶。時節悪敷つきてをけば、山名郡（やまなぐん）のうち、浅羽庄一万石損毛して、土民なんぎに及り。此押水は東海道みかの川・原川・懸川より落る落合の川。大嶋村・雁代村と云て海辺の村あり。其所にて川二筋になり、一筋は西へ流れ、福田村の湊へ落懸る。大嶋・雁代より十町余、川の程あり。一筋は東へ流、横須賀湊へ落る。大嶋・雁代より一里の余あり。横須賀へは水筋遠けれども、川ふかくしてはどひろきなり。福田へは水筋あさく、川はどせまき也。しかる処に、寛文年中の頃よりそろ／＼と福田湊への水筋ふとくなり、横須賀への水筋川あせ、今は一円に福田へ斗押水ありて、横砂への川筋へも、福田よりの潮

五 あれやこれやと。

六 遠江中央部太田川流域にあたる旧郡名。近世には袋井市田原、浅羽町、福田町福田などの地域を称した。

七 底本のまま。横須賀。

指引あり。廻船も福田湊へ出入するなり。今横須賀湊は廻船の出入會て不<sub>レ</sub>叶、不自由になる。

遠州には荒井湊・欠塚湊・横須賀湊・だいぎの湊とて四ヶ処あり。今横須賀湊は福田湊にかはる。荒井湊もむかしよりあせてあさくなり、欠塚湊も天竜川の洲を押し出しかせたり。だいぎの湊は押水つねになく、入江なき故、他国廻船出入不<sub>レ</sub>叶。相良湊の事也。数度ほるといへども、湊口ほう砂にて、一朝々々に打埋る也。海辺の潮よけ堤は、川筋の堤、堀池の堤とはつきやうの心得違ふものなり。津浪・ない潮をよける事は、かぎりしられざれば、堤をつく方便もなし。さりながら海辺の方にすて野・捨地を残し、浪のうちよせとをく、堤をつく事ひとつの方便なり。堤腹を大きにつきて、八重芝・地しばり芝を付、しの竹を植、柳をさすべし。堤腰にはらん杭をふり、しがらみをかき、そだ小口につき、また捨石をせよ。さなければ浪に洗れ、腹くづる也。から潮の所には芝も竹もかれて付事不<sub>レ</sub>叶、さら土となる。依<sub>レ</sub>之小口そだ・すて石を置てよし。堤の大小、その所によるべし。

一、雨池・堀の水をもたせる堤は、先地形を能見斗、小砂・小石・しみ

づの出る所を專一にふせぎ、堤の根敷をよくかためよ。往古の川筋・水筋には、五尺も七尺も地底に小石・小じやりありて、其所より水潜、堤きれてたもつ事なし。其見斗肝要なり。満水に水を残すやうに、かた土の処をはや口にこしらへ、水をこさせよ。土やわらかにして、ほれる事はやくば、らんくるをふり、しがらみをかきて、其間を何通もそだ小口につき上よ。惣て水持の方なる堤腹を、芝小口・そだ小口につきてかためよ。新堤急にかたまり、居付事なく、其内に池堀に水溜て、堤なきる事多し。かやうなる普請は、時節を能かんがへ、冬春の作毛すくなく、土民の耕作間をかながへべし。夏秋は土民の隙すくなし。右に記すごとく、宝土、ねば真土を善としり、小砂・小石・黒ぶく土を悪敷とするべし。雖<sub>レ</sub>然、其処々の土に成せざるは成就なりがたし。地形悪敷所を用ゝ水のため堀にほり、池に用ひても、水たもつことなく、穴あき、また堤くづれて、一旦に水押せば、作毛を流し、却て田畑に洲を押懸、無田するなり。堀と云は、何かたに老泉のある所、また水をため置よからん地をほりて、堤をつき、四季の水をためて、田畠にひくなり。池と云も同じ心なれども、往古よりくぼくて有池を見立、堤をつき、雨水をたて込

一 底本では行替えなく前文に続く。

二 新居。静岡県浜名郡新居町。浜名湖の海への出口にある。

三 掛塚。磐田郡竜洋町掛塚。古い天竜川の河口港。

四 本文にあるように、相良(さか)の港。榛原郡相良町。御前崎と大井川河口の中間に位する。

五 浅せる。浅くなる。

六 地震による高潮か。ないは地震。

七 耕作など土地利用をしないで放棄する土地。

八 辛潮。

九 新土。植物の生えない土。

一〇 貯水池。降雨をためる池。

二 早口。排水口。

三 水を保つ側の堤腹。池側である。

三 崩れる。

四 田をなくす。



置、用水にする事也。雨池は何国・いかなる村里にても、山をかゝゑたる谷間・くぼみをつき切て、山々の腰をほりわり、雨水をたて込置、田畑に引事也。四季に水のたへる処は、堤に穴あく事多し。

### 川除こゝろへの事

一、河除は堤をきらさぬ備へなり。つねの水にも、川のまがりめありては、水あて、堤の根ほれて淵となり、次第に堤あせきれるなり。ひたもの堤裏に土を置て、にげつきに堤をつけば、其処弥まがりて水あたる。さやうなる処を、川むかひとこなたに水よけをして、水の押付をやわらげ、堤をつよくし、淵には洲を居させ、瀬をちがふる事肝要也。大水の時は、取わけさやうなる所へ水当り、あぶなし。つねにかこひをするが備へ也。河よけには色々の方便あり。さる尾・石わく・袖わく・うし、柳を植、竹を植、芝を付、水草を植て置、満水をしのぐ。時に取て不叶。多年の心懸能ければ、安々と水難をのがれ、田畠無事にして、在家安穩なり。国々村里の者不心懸にしては、ねみゝに水の入事うたがひなく、作毛を流し、国土のつゑをなす。つねに水なき山川・小川なり共、四

一 底本「地」。祭本による。

二 治水工法。とくに堤を切らさぬための施設をいう。

三 逃げ築。後退しながら前堤の後に土をおいていく。

四 河の早く深く流れる所を要する。

五 これらの工法は以下本文中に説明がある。

季ともに油断有ては、其費多かるべし。水を流す処をば、急度修理し、拵置べし。是常住の備へ也。

一、川除・石わく・袖わく・さる尾普請仕といへども、押斗で当座になす事、人夫等につき其費多し。我々が国郷の普請場をば、兼て絵図認置、其図に堤の間数、水の押付、さる尾・石わく・袖わく・うしのふせ置処を記し置、万一洪水の節、水下の村里より出て、堤をかゝゑる人足等のつもりをしてしり、何方より何方まで、何村何千石の人足にて堤をかゝゑ、大水をふせぎ分と定、杭に書付をして、つねに川下の村里の土民、男・女・子どもまでも知るやうに云合・定置、夜中たり共出集り、堤をかゝゑて水難をのがるゝ心得かんやうなり。まして御当代は御公儀の御奉行衆、左様なることに油断なし。其節は御指図にまかせ、少もはやく罷出、堤をふせぐことほんいなり。国々村里に御定の郡司・庄官・五人組、猶以油断致間敷事なり。絵図にしていかがやうなることも不成と云事なし。たとへば武家にそなはる良将は、一度見給はねども、こま・もろこしの地形の事をもよくしろしめすなり。むかしかうらいを御せめ取ありし時、異国のことを絵図にして、其図を以、秀吉公諸大名へ

六 かならず。相違なく。

七 推量で、問にあわせて。

八 水のあたりかた。

九 堤をまもる。

一〇 村名・村高を記す。人夫割当の基礎を石高におくからである。

二 本意。まことの心。本懐。

三 高麗・唐土。

四 知りたもう。



## 川除、さる尾の事

るがよきなり。わくの腰には、すて石をして、杭の根ほれぬやうにせよ。

一、川除にさる尾と云事あり。水のつよく押付る所か、また水をむかひの岸へ押付る様にしたき処につくなり。川へつき出す小堤なり。さる尾さきを川下へむけ、さる尾根を川上へなすべし。水のつよき・よはきにより、さる尾の根敷・高み・長さ、大小有べし。川さきへ出るかたをばひきくつき、根の方は高くつくべし。水をつよくきりては、其まゝさる尾もくじける。小口芝あるひは小口そだ・蛇籠を以つくべし。さる尾さきに水つよく当所には、小わく・袖わく・うしをふせよ。はや川などは、

一 堤の底面の幅。

其まゝ根を洗てさる尾をながす。らんぐひをふり、しがらみをかきて、すて石をふせよ。敷を大きに取て、かうばいをのいにつき、高水をばこさすべし。水につよく当る事なかれ。堤第一の習也。石川・土川はさる尾よくきくもの也。小砂川のさる尾は根ほれ安く、うらくずれてきゝかねる。一水々々に修理をせよ。洲を居させよ。川は、定て、淵の下はあさ瀬となる。河はゞひろくなる。淵の所は川はゞせまきものなり。水の

二 一出水ごとに。

さかまく所には、岩か、らんぐいか、むもれ木あり。其処には淵多し。  
一、さる尾を長く出せば、むかひに水の当り出来て、よはみ付。其水をまたつよくふせげば、こなたへをし付らるゝ。其見斗肝要也。

三 埋れ木。

## 蛇籠の事

一、蛇籠は川除水をふせぐに第一のものなり。大竹をひしぎ、籠に組。長さは処によりて見斗用る事なり。廻りも同意なり。内へ石を入れて置。籠の目を大きに組む。また竹斗にはかぎらず、藤かつら・つたかつら・松ふさ、ほそ長くわれる木などにも組べし。石をながさぬかこひなり。じやかごはつよく水の押付る堤腹、山川のさかさまになりて、水たざりて落る川よけ、浪うちぎはの、堤を洗所にふせて、第一の物也。いくつも堤のごとくに重てふせる。石なき所は蛇籠なりがたし。一たんこたへるには土俵をも入べし。目かごのごとく、長く組むものとしれ。石川に用てよし。土川・砂川には水もるゆへ、はやく根くちけて悪敷し。されどもいつたんに瀬をかへ、また押付をしのごに便有。

四 拉く。押しつぶす。

五 目の荒い竹籠。

六 一度に。一息に。  
七 凌ぐ。持ちこたえる。

## 袖わくの事

一、袖わくは、武家に用ひらるゝよろいの小袖・大袖同意なり。川よけ水をふせぐに便有。川の方より堤の腹まで、杭を五本も拾本もふり、貫を三通も四通もぬき、扱かせを三通も四通も、ねそ藤を以結び、竹木のそだを川よりかき付をさへ、ふちを結、当る水をしのぐ。川下よりはりをかいて、水に押たをされぬ用心をせよ。川先の杭をば川下へふり、堤のかたをば川上へふりて、水をなぎらかしうけたるがよし。水にさからふ事なかれ。手がろきかこひにてよし。松丸太・雑木もよし。

## うしの事

一、川除、水をふせぐに、うしと云ものあり。丸太木にても角木にても、何様な木も用る。木二本をがつせうのごとく組。穴をゑりても、またねそだ藤にても結てもよし。また一本をがつせうの頭にもたせ、以上三組なり。二本の方を川の上に立、一本をば川下へなして、かうはりにする。三本結合組たる頭に、土俵か石をくゝり付、牛の足にはかせを結て、

一 繩に用いる藤つる。ねそは簡単な繩の意。ねそだ藤。  
二 張をかう。うっ張り用の副木を当てる。  
三 凧らかす。おだやかにする。

四 牛。牛枠。  
五 合掌。二本の頭を僅かに交差させた形。  
六 甲張か。堤根に堤の表面にならべて立てる姿をいうか。  
七 穿かせ。腰・もも・足につけるもの。ここでは牛の三つの足に横木をつけ、それにさらに竹や粗梁をつけること。

竹木のそだを当て、水の押付処々にきてふせぐ。水の当る事多少によりて、牛をふたつも三つも五つも、重てふせる。是は石川・砂川によらず、急に及び、杭のふられざる時節、俄に用る。石わく・袖わくの代と知べし。手がろく水をふせぐものなり。牛の木に穴をゑりてさしたるより、藤からげ・ねそからげ、つよくして能ものなり。また新川などをほるに、牛をふせてほらせ、人夫の徳有。またつき切のらんぐいふられざる処に用ひて、手まはし能もの也。石わくも袖わく・牛もこしらへやうつよみ入事也。猶口伝あり。

## 川除堤に柳・竹を植る事

一、水をふせぐ川よけには、堤に柳を植るにましたる事なし。然ども柳に色々有故、兼て見習、覚べし。川柳と云て、枝の多くさき、木たけの延ぬ、葉のほそき柳あり。是を水つきより堤腹に、ひと植置。秋の末に枝を中かりにして、わかばえを出さする。年々からざれば、木ふとり、大水の時、しやんとたちて居るによりて、水あたりつよくして、却て水さかまき、堤腹の土を洗ふ事多し。年々かりては、枝ほそくやわからかに

八 やなぎ科の落葉灌木。水辺に叢生。別称ねこやなぎ、えのころやなぎ。  
九 緊密に。すき間なく。  
一〇 新しく生えた枝条。

して、大水の時、堤腹へ柳の枝ひたとねるによりて、土をあらはず。かり取に伝受あるべし。丸葉柳・湯柳・こぶ柳、せいの延上らぬ柳を水岸にさせば、順々に根はへまとい、土をつまみ、堤腹くづれず。また新堤をつくに、そだに切ませ、堤につき込ば、わかば糸出る。極月より二月までさしたるがよし。先柳をかりて束にして、五三日も柳の根を水につけ置、一尺余りづゝに切て、ゆがめてさすべし。ほへはすぐに出る。すぐさしてはほへ出かぬる。柳をさす処々に、竹か木をさし込、うちこみして、其跡々へ柳をさすべし。柳をきるに、かわたがくれては、つきにくし。鎌かなたの、刃の能きれるものにて切べし。柳を堤腹にささば、川下のかたへさきをねさせよ。土きはよりも四五寸、五六寸づゝ出さべし。新堤を極月正月二月につかば、芝を付て、則柳をくに用ゆべし。大木になる柳、堤に植べからず。大風雨に堤くつろぎ、いたみ切れること多し。惣て諸木を堤に植べからず。終には堤のいたみとなる。水辺なれば、堤に植る諸木能そだつ。水性木と相性する故なり。また木と土と相こくする故あしきなり。大木などをきりて、其根くさりては、堤に穴あく事限なし。またはんの木・はりの木水木なり。然ども柳にはおとる

一 底本のまま。楊柳。

二 粗桑。

三 皮たがくれる。皮が持ちあがり、めくれる。

四 ゆるみ。

五 木・火・土・金・水の万物組成の元素(これを五行という)の關係で、水から木を生ずるの類を相生という。相性は相生である。土は水に剋(か)つる類を相剋という。事象生起の因果關係を五行で説明するのが、當時の考え方である。

六 祭本では「起」とするが、底本をとる。

七 椽の木(はりの木ともいう)は、水の多い所によく成長する木である。

なり。竹を植ば、女竹をうゑて年々かり取、のびあがらぬやうにすべし。男竹を植てしげらせば、堤くつろぎ穴あくべし。堤には土竜すみて、土をもちおこすこと多し。口なしの木を処々にさし置べし。土竜の禁物なり。またきつね・狸の穴をほりとをす事、柳も竹も土の見へわかぬ程、あつくしげりては、必堤のがいとなる事多し。堤に柳・竹・芝を付けるは、土をしめるかこひなりと知べし。

### 堤に芝を付る事

一、新堤・裏置・腹置をしては、必芝を付る。冬春は能つき、夏秋はかれる事多し。野芝はやく付、はやくひろがる。山芝はおそくつき、おそくひろがる。すゝめの枕・地しばり芝能根はり、地をしめる。すゝき・かるかや・さゝめ、ひともとく座とりて、地をしめるものならず。しかもたけ高くそだち、堤うくやく事多し。ちがや・かるかや・すゝきは、すて空地に植てよし。また大水に野越しをさする処に、置土を洗れぬ用心がよきなり。新堤をつきては、へり芝と云て、段々に芝をつけ、堤腹の土、ながれすたらぬやうにする。能芝を付れば、春のうち

九 堤の裏側(川面の反対側)に、補強のため堤なりに土をおき、固めたもの。腹置は川側の堤の斜面に置き、固めたもの。

一〇 莎草。ちがやに似た野草の名。しなやかで、編んでみの・むしろなどにつくる。二 川のほとりて耕作を放棄したあき地。

みちあふなり。惣ぐるみにつゝみては、芝一倍多く入。真土堤はへり芝にもつけよ。小石堤・砂堤は惣つゝみにすべし。さなければ、雨のうち水みちつき、堤いたむなり。芝生付て後は、馬草にかり取べし。高草となりては、堤のよはみなるべし。川のうちに空地のあらば、柳・小竹・芝・ちがや・かるかや・すゞき・芳を植置て、大水に土地を流すべからず。

### 水の出はなを知事、同ひかたをしる事

一、川々洪水に大水の出来る時、川上のちかきは、水色に山々里々の上土を流すに、ごみ・あくた・木・かやのごげてながるゝ事すくなく、水の黒みすくなく、あわたつ事大きならず。あわのうちのごみ・あくた・木・かやの葉すくなし。水の増に随て、あわくろみ、水色どろこくなり、あわの外にも木かやの葉・ごみ・あくたちり／＼になりて流れきたる。春夏は次第々々に水あたまかになりて、かさまさる。秋冬は水ひや／＼かになりて、水かさまさる也。先水上々々の山々に常住有<sub>レ</sub>之草木をしりて、其水を可<sub>レ</sub>察もの也。太山<sub>三</sub>の木かや、山里の木かやは、そだちかくべ

一 底本のまま。腹(は)とみて中グロを入れた。

二 根もとよりぬけて。

三 底本のまま。大山である。

つなり。洪水と云には、遠き川上、近き水上二日三日も雨降つゞきて、後一日か半日大雨ふりて、山の水も里の水も一同に落かゝる。依<sub>レ</sub>之見分仕安し。常ならぬ草木の葉、水に先立て流れ来る。どろ水こくなるは水増なり。ごみ・あくた多く流出るは、猶満水也。水上谷々の水なる故、出はなには水先々々たかくなりて押来る。何国の川も、水の出来るを知ば、別儀なし。

一、大水ひかたになる時は、水あわかたまり、木かやの葉こまかなる斗<sub>四</sub>ながれ来り、あらしものなし。水いろしろみ、どろ沈て見へる。尤増水とひる水、勢分<sub>五六</sub>各別の儀なり。堤腹にしるしの竹木をさし置、みるべし。

### 大水をふせぐ事

一、大水をふせぐに、色々様々なる諸道具入ものなり。惣土民兼て云合置、同じ様なる道具を持出ざるがよし。先、鎌・鎌・なた・よき・かけや・大つち・もつこ・棒<sub>二</sub>・縄つな・わらつな・なわ・竹・明俵<sub>七</sub>・むしろ<sub>八</sub>・明松<sub>九</sub>・てうちん、是等のるい也。鍬なければ、芝をきり土をよせる不<sub>レ</sub>叶。鎌なければ、そだをかり、竹をわり、縄を切る事不<sub>レ</sub>叶。なたなければ、

四 底本「ながれ」の前に「なり」あり。祭本により除く。

五 乾る水。減水。

六 格別。常の姿をこえている。異なっている。

七 芥(か)の小形のもの。

八 掛矢。標などで造った大きな籠。くいを打つこむのに用いる。巻五には「よこつち」として出るのが、その用同じ。

九 底本「大つき」。祭本による。杭をうつたもの。

一〇 畚。土・芥・堆肥などの運搬用具。

一一 底本「棟」。祭本にしたがう。

杭木を切けずる事不<sup>レ</sup>叶。よきなければ、木を切るにはかどらず。かけや・つちなければ、杭をうつ事ならず。もつこなければ、宝土を運び、石を持、土俵をはこぶ事不<sup>レ</sup>叶。もつこ有故、棒なくて不<sup>レ</sup>叶。なわなければ、土俵結事ならず。わらつな・縄つななくては、切ながし其外ひかへをする事不<sup>レ</sup>叶。竹はねそにして土俵を結、杭にさし、ながれものを取揚る也。明俵・むしろ・こもは土俵にこしらへ、水の押付にあて、堤を流はせぬ用意也。たいまつ・てうちんは夜の用意なり。猶かがりをたく用意あるべし。

まづ切ながしと云て、冬木のるい、枝のしげり、葉の多き木を集め、川下より水上へだん／＼ながしかけ、つなにてつなぎ、堤に杭を打てとめよ。松の木・杉の木など葉多して能ものなり。葉竹もよし。五本十本づゝからげ合、堤の腹にあてる。堤を水のこする処には、牛をしかけて、手まはしはやく水の勢いをよはらせ、満水して堤を水こさんとせば、急に土俵をならべ、芝をつみ、手々にむしろ・こも・切ながしの竹木を持って、爰を全とふせぐべし。むかしより大洪水と云、雨一日降たる事なしといひ伝へる。三間先の見へわからぬ程に、大雨三時ふりては、山海ひ

一 繩・綱の類。竹をくだいて、あんで造る。

二 「流れ馳せぬ」である。流失せぬ。

三 底本行替えなし。ここから各論に移るため行をかえる。

四 常緑樹。

五 ここを先途と。勝負または成否の決する大事の場合。せとぎわ。

とつになると云。伝へ承るに、左様なる雨ふりたる事、百歳に及ぶ土民もしらず。然ば三日四日五日の雨を合ても、大洪水と云程なる雨はすくなかるべし。只二時三時の水先をしのげば、大難饑のがるゝものなり。我々が住村里の家をこぼし、居林をきりて、堤のあやうき処に積重ね、其年の作毛をたすけば、うゑ・かつゑるもの有まじきなり。大河の堤下・水下に住む土民は、つね／＼の心懸肝要なり。わらつな・繩つなを分限相応にこしらへ、可<sup>三</sup>所持<sup>二</sup>也。堤近処の居林・藪を、つねにきらずはやし置て、万一の用にたつべし。不心懸<sup>ふしんけん</sup>にしては、先祖よりゆづり得たる名田<sup>なみや</sup>・屋しきを洲押<sup>し</sup>にして捨、ぶはたらきにしては、妻子共に命をうしなふ。つねのかこひ悪しくては、堤をかゝへる事不<sup>レ</sup>叶。大水の節、堤をかゝゑに出る時、急に食事をしたため持事ならず。米にても、麦にても、あわ・ひゑ・きびの類は、たしなみ持つべし。

六 屋敷まわりの林。

七 洪水の押し出す土砂が押しかかること。

八 芝の生え付いた場所。

とつの方便なり。また堤の土を目利して、はやくくづれざるねば土・かた真土の処、柳・芝のあつき処よりこさせ、堤のくづるゝ処をかこふべし。依てつねに堤の腰の芝間、芝をきる事なかれ。こし水のはゞをひろくし、何ヶ処にてもこさすべし。必洪水の時は、風荒く吹ものなり。風当の方水高くなる。其心得あるべし。森・林・藪をつねに切ては、万一の時、切ながし・らんぐい・ねそにつかふべき竹木に事をかき、水をふせぐべき便なし。堤より遠方に有之もり・はやしの竹木、多勢ならねば用にたちがたし。是則我々が村里に大河をかゝゑたる土民の備へなり。

一、大河にも小河にも、橋有処も多し。必洪水には川上より竹・木・材木・ごみ・あくた流れ来り、橋杭に流れ懸りて、橋を押たをす事多て、橋の上到大石・土俵・材木を引かけ、橋板のうかぬやうにして、長とび口・長柄鎌、あるひは竿を以、流れ懸るごみ・あくた・竹・木を押流すべし。万一、ごみ・あくた・竹・木に橋を押たをし流るゝ時は、水はゞみ、堤あやふきなり。必一たん橋より水上に水さゝへて、堤あやうくなるぞ。つねにその心得ありて、橋の両方には大石を引かけ置、また宝土を可取処を空地にして、万一の時土俵に用べし。

一 堤の上を水を越させる。

二 底本・祭本ともに「に」あり。そのまま。

一、大河は川瀬ひろく、川むかひとこなたの人夫、物云こゑきこゑず。夜中には猶、火より外そのしるべなし。川むかひの土民も、我々が住村里の水難をのがれんと、我意地まゝに水をふせぎ、堤をかゝゑる。あなたもこなたも、人夫のはたらきをみて、堤のあやうきとつよきを可<sub>レ</sub>知。先、堤たしかなる内には、人夫ちりゝに居て、水勢を守居る事、双方同意なり。水かさまさり、堤によはめ見へる時は、人足其処々へより合て、はたらく事聞<sub>ケ</sub>敷見へ、ものを持運ぶ人足、あしばやに見へるなり。

弥<sub>いよ</sub>水かさまさり、あなたの堤かこひを<sub>レ</sub>せざる時は、人足ども堤のつよき方へ退散するものなり。必こなたの水勢よはくなるぞ。夜は明松<sub>たまろう</sub>てうちんのはたらきを以知るべし。堤あやうき処へは火集り、しかも其火いそがしく見へ、処々かけ散<sub>まき</sub>、かけ集るべし。不<sub>レ</sub>叶時は、火一同に何方へか退散すべし。其時此方の水かさよはくなるべし。我々が住村里も他の村里も、堤のよはき処・つよきかゝゑ場の人足、常々たがひに知べし。無勢なる方、必堤にはやくいたみ付べし。御地頭<sub>じぢう</sub>には、堤のつよみ・よはみ・水当<sub>みずあた</sub>・かゝゑ処つねに能しろしめし、川筋の絵図、双方村々里々の田島御事務<sub>しよじよ</sub>、また在家の水にをぼれて人馬の生死有処まで御かんが

三 底本「人まかりく」と読める。祭本によって直す。

四 見守っている。

五 囲いとおおせざる。堤を守りきることができない。



へ、何方にて災難のかるき方を、堤をきりて水をちらし、人馬をたすけらるゝ。御当世は国々里々大河有<sup>レ</sup>之所は、堤を能つき、さる尾・石わく・袖わくを以かこはせらるれば、水難すくなし。されどもうつりかはりて、川筋は淵瀬<sup>（淵）</sup>のかわること多きなり。

一 底本行替えなし。例話となるので改行。  
二 その昔。  
三 一六二四―四三年。  
四 崩えて。くすれおちて。  
五 堤が決壊して、そこを守る袖わくが大規模となる。  
六 水練。泳ぎの上手。  
七 梢。  
八 所為、せい。  
九 底本・祭本ともに「あたる」あたりで。  
一〇 底本「禾」。祭本による。

へ、何方にて災難のかるき方を、堤をきりて水をちらし、人馬をたすけらるゝ。御当世は国々里々大河有<sup>レ</sup>之所は、堤を能つき、さる尾・石わく・袖わくを以かこはせらるれば、水難すくなし。されどもうつりかはりて、川筋は淵瀬<sup>（淵）</sup>のかわること多きなり。  
一 底本行替えなし。例話となるので改行。  
二 その昔。  
三 一六二四―四三年。  
四 崩えて。くすれおちて。  
五 堤が決壊して、そこを守る袖わくが大規模となる。  
六 水練。泳ぎの上手。  
七 梢。  
八 所為、せい。  
九 底本・祭本ともに「あたる」あたりで。  
一〇 底本「禾」。祭本による。

腹へ押付、それに水つよくあたてほれるにて有べし。所詮<sup>（所詮）</sup>、其木に綱を付て参らんかとありければ、水れん安き事なりとて、大綱あまた取集め、水れんかの繩を持、水中にくぐり、三ヶ処にくぐりつけてあがる。先より集める所の土民、綱をつぎのべ、川むかひの河原にのぞみて、百人斗にてひきてみるに、少もうごくくこゝろなし。近辺の村々より人足をあつめ、四五百人にてひけどもうごかず。奉行人<sup>（奉行人）</sup>・土民ももてあつかひ、河原に休み居る処に、俄に天気かわり雨降出す。人足も堤にあり居る処に、大雨しきりに、水増やうに見へ、繩ゆるむかと思へて、川上へたゞいつたんに上り、桑名の入江へ出るかとなり。古老の云、竜にて有べし。必、竜は海に千年、川に千年、山に千年すみてのち、天上するといへり。悪気なきものにて、人をぶくすするものにはあらずと也。水を得てはちからつよく成ものときく。

一 底本のまま。「ぶくさする」であろう。服するは承服する。  
二 底本行替えなし。話題異なるにより改行。  
三 一六四四―四七年。

東海道<sup>（東海道）</sup>の海表よりは、ゆふだちの節、竜の水をまきあぐるが、あきらかに見へる事、正保年中<sup>（正保年中）</sup>の頃も、尾州熱田の沖より竜あがり、名古屋近処千本松の南をすぢかい、古渡りの辺、三州さかい、伊賀いか井の村を通り、さなげ山筋より信濃路へ上る。四月の頃にて有けるに、麦畑などは

ひしげ付たるやうになる。諸木にあたり、ねぢきりたる処には、血がつきてあり。村里の家をまきては、二里三里のうちにすてたり。俄に風吹、雨降出すときは、在家みな長竿を立て、人々こゑを上て、雨風を追ふべし。其子細は、竜のとをる先へ、黒かも一つがい宛とをるなり。かもは水辺の鳥なる故、先々も水の有処へより処はをりず。家に竹をたて、こゑをたつれば、黒かも高く通るにより、竜も高く通、災難にあわざるものなり。依<sup>レ</sup>之俄風をち、雨ふるときには、何国の村里にも竿のさきに籠をつるし、また鎌などゆいつけたち置、人々こゑを上て風を追ふなり。黒かもをばかると云て、常住里の池・川・堀にすむ。其外なるかもは、春彼岸の頃みな北国系ぞへ帰、秋の彼岸過にまた本朝へわたる。其まゝ深沼・芦原などに居るも有。黒かもは山の谷合草しげき所、深沼のまこも芦原にて子をなすもの也。竜は日光山中禅寺の池にも住て、度々水をまく。日光のしりきれ竜と近辺の土民云伝ふ。水をまきあぐるとき、大かたのかたちとなり、おもひの外に池川ふかく成。難儀出くるときは、不斗竜などの住処となると心得べし。

一、大河なりといへども、里斗大雨にて、山中に雨降事なければ、大水

出ることなし。また里は雨降ずして、山家大雨にて大水出くる事多し。世話にも、大水出れば、とちがらさきにたつといへり。とちの木にかぎらず、みやま木はみな里木とは各別なり。万治年中より寛文中は、諸国に大水出ること多く、田畑に損毛多く、世間もゆたかならず。其節国々の大水の様子をきく、誠ふせぎがたく、堤もかゝゑがたき事也。本朝第一の木曾川・矢作川・天竜川・大井川・富士川の体、つねのかこひあしくしては、其期に至て、片時の間も堤かゝゑがたし。永禄年中よりこのかたは諸国御豊饒に付て、私領・御領共に、川除堤・井堀・池等までかこひ能なり。田畑に損毛なく、人馬水にをほるゝ事すくなし。

### 潮除堤善悪の事

一、潮よけ堤は、川筋の水をふせぐ堤とは、心得少のかわり有。潮みちては浪をうちよせ、堤の腰を洗ふ。から潮のうちよせば、芝を付てもかれ、また小竹をうゑてもかるゝ。小口そだ・蛇籠・すて石をしてかこふに、多年の普請ならず、其まゝ打あらずもの也。堤を重ねてつき、先堤に浪をうけさせ、後堤にて潮をふせぐべし。是皆つの備へなり。先の堤

一 拉ぎつく、おしつぶし  
くだける。

二 巻きあげて。

三 底本・祭本ともに「を  
ち」。たちか。

四 かるかも(鰐鰯)。雁鴨  
科の水鳥。体色は大体褐色。  
夏もわが国に留る。

五 折殺。折の夷。

六 日常の。

七 永禄は一五五八―一六九  
大洪水の多かったという万  
治―寛文(一六五八―一七二〇)  
以後に永禄または禄のつく年  
号は、元禄以外にない。こ  
れを元禄とみれば、書中最  
もおそい年号である。これ  
以外は、延宝八年である。

八 海岸の潮をよける堤。

九 底本「かるく」。祭本  
による。

一〇 底本「すく石」。祭本  
による。

一一 多年にわたり維持でき  
る工事。

一二 堤を二重に築き。

を根敷をひろく取て、かさをひきくつきて、浪をならすべし。後の堤はつねのごとく丈夫につくべし。一かわにつきては、浪ふとき節たもつ事不<sub>レ</sub>叶。また川の水をふせぐごとくにふせがるゝものならず。天気よく風なき時も、おもひの外浪たかぶりては堤をいたまするものなり。しけ空になりては、必高浪多し。しけると云は大雨降なり。其節は内の田地満水となる。外の浪はまた内の水より高し。双方より堤をせめるによりて、人夫をよせふせぐに方便なき事多し。されども満水の田地へ潮入りては、残り毛多し。から潮斗作毛につかりては、一毛ものこらず。みなくさりすたる也。堤をふせ、戸ぶたをするにも、潮よけ堤の下水はきには、裏表にする。しかも水と潮と合するによりて、扒板を虫喰ひて、多年たもつ事なし。潮ひがたになりては、内の水をたといつたんに切ながさねば不<sub>レ</sub>叶。堤を何ヶ処もきるによりて、新<sub>六</sub>とことなり、つねに堤あぶなし。扒斗にて下水をはかしては、数日を経る内に、四季の作毛くさりすたる故なり。依<sub>レ</sub>之つねく堤をきるべき処を、うち・外に空地をしして、芝をはやし、すて石を置いて備へたるがよし。内の水をきりながすうちに、またしけ空になれば、切りたる堤を、夜中によらずつかねば潮入。

一 堤の底部の幅。  
二 筥。堤の頂部。

一 作物の荒れのこり。真水をたたえないで海水ばかりが作毛をひたす後段に比べていう。  
二 水門。土手の下に樋を埋め、用水・悪水を通す装置。  
三 扉を裏・表二枚にする。新床か。何カ所も堤を切りはなし、堤内の水を流去させ、新しく造った堤が多く、それが弱いことをいうのであろう。

六ヶ敷は海辺の田地、潮よけの堤なり。

### 国々津浪物語

一、寛永年中の頃、三州かたの原・田原・西之郡・あいは・吉田の辺へ津浪入て、人馬多く死す。家をながし、作毛を損。八月の事にて、野分の大風に大雨降、富士をろしの大風南にまはり、南しけのうちに津浪三つ打となり。中ひとつ大きな浪にて、初・後の浪二つはちいさくうちたると、古老のいゝ伝へる。引潮になりて、みな命をすてたると承る。常陸水戸御領、津浪にて海辺の村々、人多く死する。此なみも三つうつとなり。中ひとつ大きな浪なり。初・後はちいさき浪なるとぞ伝へ承る。此節も南しけるに、高浪来るとなり。延宝八年閏八月六日巳の下剋に遠州海辺津にて人馬多く死する。是も八月富士おろし大風の後、南しけになり、ふる雨潮のごとくからく、浪三つうちたるに、中ひとつ大きにし

七 かたの原(形原、愛知県蒲郡市内)、田原(同渥美郡田原町)、吉田(現豊橋市)の地名よりすれば、渥美湾内の津浪である。  
八 旧九月から十月にかけて吹く風。  
九 ふじ嵐。富士山から吹き下す風の意であるが、静岡県磐田郡では東北風のことをいう。

二 一六八〇年。

て、初・後二つはちいさしとなり。横須賀御城惣曲輪中土井まへにて浪とまる。御城より南東の村々、西の村々、潮ひたりになる。中にも東同笠村・西同笠村・大野新田・中新田・今沢新田に潮つよくあたり、此四ヶ

二 城・岩などの周囲にある、土や石のかこい。  
三 土唐。土の垣。

村五ヶ村のうちにて、老若男女三百人に及び死するなり。横須賀より三里西、欠塚までの高浪なり。よこすかより東の浜辺はさほどの高潮ならず。卯の剋より風吹出し、巳の下剋、南しけになりて潮上るなり。午の下剋に西風になりて、天気晴る。むかし永禄年中津浪入たる節も、御城東の村々南の村々、東同笠村・西同笠・大野新田・太郎介村・湊村・中野村・羽野村・東山村・初越村・西ヶ崎村・松山村、海辺ちかき処へ、八月の南しけに浪三つ入。老若男女合千余人、水潮にをほれ死。右の村々北西の山ぎは上諸井村・下諸井村・芝村・馬場村へ打あげられ、処の士民墓をつき、尔いま今有いま之。かやうなる節は、何ほどつよくつきたる潮よけ堤も、たゞいつたんに打越、引潮になりて、みな堤を洗ひ取て行。何国も同事なるべし。右の潮の高さを斗はかり見て、寛文中本多越前守殿、浜辺の村々に水塚をつかれけるにより、村々の男女心安く住居するなり。一、万治年中より寛文中に至る、諸国数度洪水有。中に延宝二年七月に、飛驒山家・美濃・尾張・信濃・甲斐・駿河・三河の山中大雨にて、山を洗ひ、谷を破て大水出くる。木曾川・矢作川・吉田川・天竜川・大井川・阿部川・富士川満水して、山家より木・かやを流すこと、川々み

一 午前六時から七時。  
二 午前十一時。  
三 午後一時。  
四 ここには延宝八年よりむかしとして永禄が出てくる。先の永禄を元禄としたのも疑わしい。

五 一六六一―七二年。

六 一六五八―一六〇年。  
七 一六七四年。

な筏いかだをくみたるごとく也。いくとせもなく木どもの埋たる谷々を破て、水ながれ来るによりて、二百人三百人しても、うごかしがたき大木、何万と云事かぎりなく、生木の根こぎになりたるに、ごみ・あくたまじはり、一日一夜程いづれの川へも流れ出。荒海へみなをし、南風に磯へ打上しを、海辺の人我がちに取あげ置しに、その年八月に大潮浪うちて、かの材木ども、みな海に引出しけるとなり。海・河のきわに住む人々、つねに海のけしきを見覚、水色を見覚、聞伝、用心すべし。高浪のうつに、二日も三日も磯の浪なくなりて、沖の浪山のごとく高く成としれ。其浪風に随てころびたる方へ、大浪入と海辺の古老の伝也。

### 山川の流れをふせぐ事

一、何国の村々里々も、山川の流れは、水出る事急なるものなり。あなた・こなたのまがり目へ水押付、ほれて、くゑくゑかけ、堤の根を洗ひ、また山の腰をほりて、其まゝくづるゝによりて、せぎとなり、何方どなたのかこい堤がまたぎれて、田地を洗、砂押にして損毛あり。きりながし・うしをしかけて水をつぼませ、ながすべし。大水のために、田地有いま之処々

八 崩れ・欠け。

には、小堤たり共、竹を植、柳をさし、芝を付置て、万一の時に水をち  
らして、はやくひかせよ。水上の山々しげりては、水ひく事遅し。野山  
のごとくあせては、水引事はやし。そのころへ有べし。山川には、つ  
ねに水なくしても、水上の大雨降ては水出。土民油断ありて、損毛する  
事多し。山川の流は、さかをとしに水ながるゝものなり。大かたは石  
川・砂川多く、土川すくなきものなり。つねに蛇籠・石わくを以かこひ  
をなすべし。あなた・こなたへ洲を押上て、川筋かわるものなり。山川  
の両わき田畑有之に、川くぼくなるは薄田となる。河たかくなりて、田  
地くぼく成は、上田畑となる。

### 岩川・砂川・沼川をほる事

一、岩川は、かた岩・土岩によらず、水の流をなすとき、ほるにつる  
のはし・かなつき・石のみ・げんのうを持って、岩をきりわけ・つきわり、  
縄を付て引取、水をたてかけ岩根をほらせ、川下より次第に川上へほり  
上るに、水足はやくなりて、普請仕よし。川上より川下へ普請をしては、  
しにも洲たまり、水勢よはくなりて、普請に人夫多く入ものなり。ひた

一 鶴の嘴。つるはし。土  
工用具。固い土を掘るに用  
いる。巻五のその項参照。  
二 金棒の先をとがらせた  
ものである。  
三 石鑿。石切鑿。  
四 玄能。鉄鎚に似て大き  
く、頭の両端のとがらぬも  
の。多く石を割るに用い  
る。  
五 急に流しつけて。

もの瀬ちがひをして、岩石をきりわるべし。必大岩の有之辺には、田畑  
もすくなきものなり。岩川は普請はかどるものとしるべし。併、岩をわ  
る方便をしらざれば不叶。

一、砂川はほりよきものなり。水をつぼめ、船をつなぎ、いかだにのり、  
また水に入、ちぎりのごとくなる板を持って、砂・石をもじり、川の両脇  
へ押付る。また鍬・鋤を持って、ひたものかきなでて、川中をふかくなし、  
両脇へ砂石さらへ付る。川一めんにならび居て、さらへざれば、川下に  
瀬出来て水勢よはくなる。つねに水勢のよはき川は、押水を待てほるべ  
し。ほりよきものなり。

一、沼川はかきながす事不叶。必水勢よはきものなり。鉄ぢよれん・  
竹ぢよれんを持って、沼をすくひ取べし。水勢有処をばかきながすべし。  
船・筏を用てほらざれば、方便なし。川をちがへ、水をかへてほるは小  
川の事也。はとひるき沼川は、ほるに人夫多く入ものとしるべし。

### 井堀の事

一、田地用水のために、井堀をほらずしては不叶もの也。四季共に普

二 田の灌漑用水。

六 乳切。乳切木の略。両  
端を太く中央を少し細く削  
った棒。

七 押し流してくる水。増  
水。

八 鋤簾。鉄製・竹製の砂  
をかきあげる道具。

九 流路を変更する。

請あるべし。国処によりて、冬のうち草麦にも水を仕かけ、こやすことこれあり。またこわ田を冬田かへし、水をつけるものなり。不性地の虫わく地に、寒のうちの水をつけてよし。用水懸りの井溝、下水ながしの井堀あしなくては、田畠に水をひく事不叶。また大雨に下水はき兼て、両様に費あり。秋に稲をかり取て、其まゝすてをけば、水のかよひあしく、土流込、正二月普請の節、人夫手間多く入なり。井溝第一我々が住村里、田地のかこひなり。春は水を仕かけ、土をやわらげ、田をかへし、小手切。夏は猶田に水をつけ、荒しろ・中しろ・植しろ・田植水に用る。稲を植て後は、かわかすことなく、かわきに望では畠にも水をかまかくる。秋になりては、水のいらざる時、秋の内、田ごと細みぞをほりて、井溝・堀へ落す。たがいにいひ合、土くれひとつをも井溝にをくべからず。水を引ながすついでとなる。つねの心懸をよくして、我々がひかゑの田畑のきはを通る井堀をば、土のをち込ぬ様にし、をち込の土・こみ・あくたをつねに取あぐれば、水のかよひよし。互にすてをきては、いつとなく用水を取事も、下水をはかせる事も不叶。損毛あり。田地ををしみ、井溝をせまくほる事あしきなり。第一田に水を引て、稲をそ

一 稗の伸びはじめない、叢状の麦。  
 二 剛田。土の固い田。  
 三 使いながしの水。悪水ともいう。用水に對していう。兩者を別に設ける時、悪水・排水路は、深くなければならぬ。

四 田の土を鉄で細く砕くこと。卷九の「春田を小手切・ほかす条々」参照。  
 五 荒代・中代・植代。田に水を入れ、馬糞でかく代振の三つの段階。卷九のその項参照。  
 六 臨んでは。  
 七 替掛る。

だてるもの也。稲のもてる時は、なる程あたゝかなる水をかけてよし。そのためにはぶをひろく、あさくほりてよし。またかわきに望では、ひやゝかなる水をかけてよし。其節は竹木の葉を溝にかぶせて、水に目をあてぬがよし。木の下・物陰を通るやうに井堀をほらぬがよし。大溝、土の落込には萩・よし・まこも・がま・菖蒲を植てよし。小堤には芝斗を付て、柳・小竹を植べからず。土のかたき所、やはらかなる処、能見斗て、水のもらざる様にすべし。小堤の敷、一間二間有之は、裏表へ穴の明事有之。つねにこゝろがけ、水をもらすな。田畑のやうがい也。

為三用水、雨池をかまゑる事

一、雨池をつくに、いづれの処にても、地くぼなる処を用ひ、堤をつきて、其地にたて込む水を見立よ。さなければ沢山ならず。我々が田地よりも地高なる処より井道をつけざれば、水懸りあしきなり。石地・砂地は水くどりて、用水とられず。また井道に沼ありては不叶もの也。  
 一、雨池新堤は、二年も三年も、水もる事多し。年々修理を加へべし。堤敷かたまりては、水もる事すくなし。新堤の時ねば真土を第一に持か

八 おぎ・葎・真菰・蒲・菖蒲。いずれも水辺・水中に生え、土粒の流れるのを防ぐ。  
 九 要害。地勢が險阻で敵を防ぎ味方を守るに便利な地。田畑を良い状態に保つための重要な場所。

一〇 貯水池。  
 一一 地窪。土地の低く、くぼんだ所。

一二 堤の敷地。

け、たゞきつけさせよ。そだを入、土俵を多く入るゝ事なかれ。後日のためあしき也。山間片さがりの谷を雨池に用ひば、堤を段々何筋もつき、処々にて水をもたすべし。一ヶ処にて水を持せては水すくなく、堤もあぶなし。樋をふせ、<sup>二</sup>坎をふせる事、土のかたく、<sup>三</sup>坎敷兩脇のくゑはれざるやうにふせべし。兩脇敷の下へ、<sup>四</sup>其処になき、見知りよき土・炭・かわらけをくだき入置べし。尤、<sup>五</sup>檜・樅・杉の木こまかにわりたるを入置て、満水に坎くゑぬけるか、また堤に穴明たるを知べし。坎に用る材木・樅・楠にましたる木なし。尤、こゑ松も能物なり。坎は堤の敷よりも長くして、ふせをくべし。堤のうち端に有之は、堤のよはみとなるもの也。樋穴も、段々数をほりて、水を落すべし。日損に及び、田かわきに望む時節は、樋を水底の穴より抜落してよし。ひやゝかなる水を用てよし。水多なる時は、上水より流すべし。ひやゝかなる水あしきなり。また川筋より用水を取、坎をふせたらば、水口の方に、五間も六間も溝筋に坎のごとく仕たる、ふたなき樋をふせ、水口のくゑぬやうにせよ。毎度普請ならぬものなり。水門の戸ふたを、二重にも三重にも<sup>六</sup>拵、よはみなきやうにふせぐべし。戸を抜く所に鳥居木を立て、まきろくろを仕

一 水を導き送る管、といこ  
こでは地中に設けるもの。  
二 水門。  
三 見分けやすい。これら  
が下流に流出すれば、坎に  
損傷のあることが知られる。  
四 陶器のたぐい。

六 貯水池側の坎の入口。

七 鳥居形の木。  
八 巻き籠籠。滑車に綱を  
まきつけて、くりあげる装  
置。

懸置、人夫すくなくも自由なるやうにせよ。水はき口の方には、らんぐ

九 水の出口。

ひをふり、そだを敷て、水底坎のはき口ほれざるやうに覚悟すべし。水口のかた坎の兩脇腹に、本木を二本立置、満水の時にも坎口を能しり、水もらざる内に土俵を沈め、水門を埋べし。油断ありては、難儀出来る也。

### 堀をほる事

一、田地のうち、また山々の崎、野原のうちまりたる、泉・清水出る処、国々処々に多し。其処には堀をほりて、堤をつき置、四方八方へ細溝をつけ置て、日損に及びたる時は、水を汲みかけかゑかけ、作毛をからさず、雨をねがふべし。田々々、<sup>二</sup>鳥旱、<sup>三</sup>鳥旱わかれては、作毛の根ぎれて、雨ふるといへ共、いきかへる事不叶ものなり。たとへば<sup>四</sup>絶入ひとにくすりをのませ、寸の間をいかし、良薬を以よみがへる心なり。一滴に一本宛の稲たすかりては、また来るとし種に用ひ、万倍となる。

二 狭くなる。

三 田が突みわれる。

四 絶命しようとする。